始めに

永富青地

二〇〇七年に「陽明後學文獻叢書」の一つとして風凰出版

『東蕉鄧先生遺稿』の諸本について

ももちろん、同書が鄧守益の著作を完全に網羅しているとは

言えず、文献学的に見て、後述のごとく若干の問題ないと

なったとはしても避けられないものであり、今後は、それらの

遺漏の補充・修正が、鄧守益を研究するものにとって、大きな

責任となると考えられるのである。

本稿においては、そのような『鄧守益集』の缺を補う作業

の一環として、日本長崎門文庫、臺灣國家圖書館および上海

圖書館に所蔵されている『東蕉鄧先生遺稿』について述べる

こととした。

「陽明後學文獻叢書」所収の『鄧守益集』は、隆慶六年（一

五七三）に刊行され、清初に重刻された十二卷本『東蕉鄧先生

文集』および光緒三十年（一九〇四）に刊行され、民國十五年

『鄧先生遺稿』を底本としている。このうち、両者の素性は明

らかであり、特に問題はないと考えられる。しかしながら、

後者の十三卷本『東蕉鄧先生遺稿』に関しても、それが鄧守
『東郡郷先生遺稿』の諸本について（永光）
卷八

は 『巻之八』 とのみ記す。各巻巻首の書名の次に行い

『斐人彦陵周怡校、不肖男善輯』 と署されている。

本書と、萬曆元年（一五七三）刊刻された『尊經閣文庫藏本』
とを比較してみると、『尊經閣文庫藏本』を『宋儀望、邵康』
の校正、『鄭善の編輯の後、宋儀望の校正、邵康の校梓を謳
っており、『臺灣国立圖書館藏本を宋儀望、邵康』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たものが考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』に
刊行年を示すものは知らないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』と考えられるのである。従って、『臺灣国立圖書館藏本』
に刊行年を示すものはないが、『尊經閣文庫藏本が刊行され
たもの』
なお、本書は版権縦十八編、横十一・七編、半葉十行、行二十二字。四開装、花口、單魚尾。魚尾上に「東廵 Scrolls 」の記載あり。刻工名の記載なし。印は「上海圖書館」。

『線普長三一八二一三』（以下、「A本」）。
八冊、軸、夾板等は無し。題記、封面および「A本」に添付されていた朱紙はない。序跋類は無し。「東廵 Scrolls 」の目録一有り。目録末の題記は「A本」と同一だが、朱印は鮮明ではない。

『線普長三一八三一九』（以下、「B本」）。
十册、四開装、花口、單魚尾。魚尾上に「東廵 Scrolls 」の記載あり。刻工名の記載なし。印は「上海圖書館」。

以上の二部はともに清光緒三十年（九九四）刻本と認められる。それ故に、おそらく「A本」の十二冊が原装であり、「B本」はそれを四冊に改裝したものであろう。また、「A本」（「B本」は四冊、軸、夾板等は無し。題記、封面および「A本」に添付されていた朱紙はない。序跋類は無し。「東廵 Scrolls 」の目録一有り。目録末の題記は「A本」と同一だが、朱印は鮮明ではない。

『重印東廵 Scrolls 』の著文は、民國重版本について述べた。
巻三十二に関しては、『東廓鄭先生遺稿』と『東廓鄭先生文集』の両方で配されている。なお、この『東廓鄭先生文集』は三巻本であり、その完全本は内閣文庫に所蔵されている。内閣文庫本に関しては、挿稿『内閣文庫藏 東廓鄭先生文集』について（汲古秘籍研究会、二〇〇〇年）を参照されたままで判明しなかったのは、これら二部の著作の書式が酷似していたことによるところが大きい。その理由としては、これら部がほぼ同時期に、いわばセットとして刊行されたものであると考えられるのである。

巻三十三のみ、『東廓鄭先生遺稿』巻三十二とすると。なお、序文執筆を担当している。同書に関しては挿稿『天津書店刊、二〇〇二年』を参照。

なお、この点に関しては後考を待たなければならない。この四部の東廓鄭先生遺稿目標においては巻八までしか記されておらず、この点に関しては後考を待たなければならない。

巻九は『東廓鄭先生遺稿』巻二十七、同書三四四頁においてこの文を参照しているが、『東廓鄭先生遺稿』巻二十七、同書三四四頁においたこの五字は失われている。

巻十は『東廓鄭先生遺稿』巻三十二とすると、同書の非先生之教根本節目黌然至大を参照のこと。なお、筆者による郷遂益の著作に関する既発表の論文としては上記三、四の他に、『廬山書籍』巻九、同書一〇〇頁に存在する郷遂益の著作に関する既発表の論文については、現代の学芸社会科学研究所（日本）が行なった『東廓鄭先生文集』について、現在までの郷遂益の文集と人文社会科学研究第五十号（二〇〇〇年）を併せて参照された。